

## 『京阪神附近實測精図』

明治45年 日下伊兵衛 和楽路屋 105×87cm 関西大学図書館蔵

袋には、「明治四十三年調査 明治四十五年補正」と記載され、「とある西部鉄道管理局、南海鉄道株式会社、○南鉄道株式会社、高野鉄道株式会社、阪神電鉄株式会社、京阪電鉄株式会社、箕有電鉄株式会社、嵐山電鉄株式会社、阪堺電鉄株式会社。大阪軌道株式会社、通信管理局各君其他垂示御賛助」とある。左上は多紀の吹新、神戸に降り、下は垂井の先、中央上が亀岡の先、中央下は紀見峠、右上が大津、加茂、春日山を降りて、吉野山までの範囲が「京阪神」となっている。付図として「和泉国南部略図」があり、西は岸和田から加太、東は、「小山田」は現在の河内長野市小山田町、ここから滝畑の先まで範囲となっている。「泉南地方ハ要塞地ニ係リ詳密ナル地図ノ発行ヲ許サレザル法制アルガ故ニ本図ヲ以テ之ニ換フ」と説明されている。が、本地図の方には比較的詳しく街道筋や市町村落が描かれている。

各地主要な寺社、皇陵、名所には、名前の下に赤線が引かれる。河内長野市にある盛松寺が「與通大師」と記載されているなど、地方の小さいながら主要な寺社も記載されている。奈良には「天理教」も赤線引きになっている。一方、大阪の赤線引きは大阪城と四天王寺だけで、あとは「監獄」、堀川監獄、今の扇町公園、が示されているだけである。

当時の街道筋が詳しく、町と町とのネットワークが一望できるのはおもしろい。中河内は生駒山系の麓に南北に町が連なっている。泉北、泉南、堺から藤井寺には沼池が多数あることがわかる。吹田は大きな集落であるが、その周りは豊津、千里、山田の名前がある程度、千里は佐井寺が大きめの集落である以外は、何もない土地だったようだ。

中央は大阪湾に注ぐ(新)淀川である。加茂からの木津川と宇治川などが大山崎で合流し、大阪湾へ向かう流れがよくわかる。八幡の石清水八幡宮は「男山八幡宮」となっている。牧野、枚方を過ぎ、守口を通り、毛馬、柴島を経て、大阪市内へと流れ進む。

京阪神と広い立場から大阪を見ると、大阪の位置関係がはっきりとわかり、大阪への物流や人材の流入の道筋が見えてくる。街道ばかりではなく、海の道、川の道が、大阪の発展に大きく貢献してきたことは、この地図がよく物語っている。

関西大学図書館には、『大阪附近實測精図(京阪神附近實測精図)』という同じ和楽路屋発行の、ほぼ同じ範囲を扱ったカラー地図もある(デジタル化は行っていない)。発行は大正十四年三月となっているが「昭和五年三月一日鉄道補入」と赤字がある。2枚を比較すると、わずか十数年で、京阪神地域が大きく変わった様子がわかってくる。(このころには、関西大学千里山キャンパスは開学しているのだが、地図には何も記載がない。)

